

# 『どんぐりと山猫』（宮沢賢治）の絵本化と異界の描き方

## A study on the depiction of another world in the picture book “Dongurito Yamaneko” by Miyazawa Kenji

馬見塚 昭 久

MAMIZUKA Akihisa

### 要旨

宮沢賢治の童話のいくつかは、現実世界と異界との境界を設け、双方を行き来するという近代的なファンタジーの構造を持っており、これを視覚化することは非常に困難であると考えられる。

本稿では、童話『どんぐりと山猫』の作品構造を確認した上で、現在でも入手可能な絵本『どんぐりと山猫』の中から4冊を抽出し、(1)各絵本の世界観 (2)登場人物の描き方 (3)時空の移動 の3つの観点から分析した。その結果、個々の観点については原作の趣旨をよく反映させているものもあったが、3つの観点すべてについて原作の核心を正しく反映させた作品はないことが判明した。童話『どんぐりと山猫』の絵本化は、まだまだ発展途上であることが改めて浮き彫りとなった。

Key word：ファンタジー 世界観 時空の移動

### 1 はじめに

絵本は、絵（イラストレーション）と言葉（テキスト）が協力し合って作品世界を構成する特殊な表現媒体である。そのため、絵本における絵は、単なる内容の説明ではなく、言葉では言い尽くせない世界を豊かに表現するものであることが多い。当然のことながら、出来合いの昔話や童話を題材とした昔話絵本、童話絵本であってもそれは同様で、原作に対する深い理解と解釈に裏付けされた効果的な絵であることが求められる。

そもそも、童話というものは、それ自体が完成された物語であり、絵を必要としない純粋な「言語芸術」である。それらに絵を加えて安易に商品化することは、読者に絵本作家の解釈を負わせることになり、原作に対する冒瀆とも捉えられかねない危険性を孕んでいる。

殊に、今日でも人気が高い宮沢賢治の童話は、様々な作品が複数の出版社から絵本化されているが、その独特の世界を解釈し視覚化することは非常に困難であると言われている。<sup>(注1)</sup>

本稿で取り上げる童話『どんぐりと山猫』は、生前に出版された唯一の童話集『注文の多い料理店』

の巻頭に収録された重要な作品で、家出同然の上京から妹の病気により急遽帰郷した1921年8月頃、猛烈な勢いで始まった創作活動の初期に書かれた作品だと考えられている。「岩手県の自然交感に満ちた佳作」<sup>(注2)</sup>と評価され、これまでに何度も絵本化されてきた。現在でも5社以上の出版社が販売中である。

従来、この作品は、誰が一番偉いかをめぐる争いをするどんぐりたちの裁判を、主人公の一郎が聞いたという「お説教」の言葉によって収めた点が注目され、「童話『どんぐりと山猫』の主題は、まさに、この『デクノバウ』礼讃であると見られる。つまり法華経教義の眼目である『菩薩』を知らせたものがこの童話である」などと解釈されてきた。<sup>(注3)</sup>

もちろん、この解釈はいまでも概ね妥当なものであり、絵本化にあたって作品の主題として描かれることは十分に考えられる。だが、童話『どんぐりと山猫』は、当時、文壇で活躍していた作家たちの童話とは違い、現実と非現実（異界）を分けて描いた、特殊な世界観に基づく珍しい作品である。その世界観が作品の思想として根底に流れているため、ある意味、そこが最も重要であり、作品のもう一つの主題であるとも考えられるのである。賢治の童話の中でも、特に解釈と絵本化の難しい作品であると考えられるが、各絵本作家たちはそこをどのように理解し視覚化しているのだろうか。

本稿は、各社の絵本『どんぐりと山猫』を、主として異界の描き方に注目して比較し、それぞれの絵本作家による解釈の違いや表現の特色を確かめ、現状と課題について考えようとするものである。

## 2 童話『どんぐりと山猫』の位置づけ

絵本『どんぐりと山猫』を分析調査するために、まずは、原作である童話『どんぐりと山猫』がいかなる作品なのか、その位置づけを措定しておこう。

日本児童文学史上における賢治の評価については、ここで詳しく扱うことはしないが、自ら「心象スケッチ」と呼称した彼の作品方法論は、「万法流転の仏教思想と相対性理論の四次元、それに心理学上の意識の流れとが融合したものと言われ、文芸方法論であると同時に文芸思想でもあった」<sup>(注4)</sup>とされ、独自の視点や豊かな感性によって描かれた幻想的、神秘的な作品の数々が高く評価されてきた。

賢治が残した物語は、一般的に「賢治童話」などと呼称されているが、その作品の中の何篇かはファンタジーの要素があることが知られている。

一般的にファンタジーとは、「空想」や「幻想」、転じて「幻想的な小説・童話」のことを指すが、賢治の場合は、現実と非現実（異界）を書き分けた、近代的な形式を持ったファンタジー児童文学に近い。例えば、日本児童文学学会編『日本児童文学概論』には、次のように記されている。

宮沢賢治は大正期の日本児童文学界で、ただ一人、本格的なファンタジーの書けた作家であった。<sup>(注5)</sup>

また、児童文学者の谷本誠剛はその著書の中で次のように述べている。

賢治の童話の子細に読むと、実は賢治自身この外来のファンタジーの概念をよく体得していること

が実感される。さらに、賢治はその童話において、まさに他ならぬこの「ファンタジー」としての作品をこそ書こうとしていたのだということも実感されるのである。<sup>(注6)</sup>

ところで、近代的なファンタジーの多くは、現実世界から何らかの通路を通過して異界へ行き、そこで目的や使命を果たし、再び通路を通過して現実世界に戻ってくる、という「往きて還りし物語」の構造を持っている。(現実世界) ⇒ (通路) ⇒ (異界) ⇒ (通路) ⇒ (現実世界) という流れになる。これを本作品（※本稿では、『校本 宮沢賢治全集 第十一巻』筑摩書房、1974.9.15、pp.9-18 を底本とする）にあてはめてみよう。

- ①（現実世界） 一郎が葉書を受け取った自宅
- ②（通路） 山へと続く谷川に沿った小道
- ③（異界） 馬車別当や山猫に会い、裁判に臨んだ草原
- ④（通路） 一郎を送るために、きのこの馬車が通った空間
- ⑤（現実世界） 自宅の前

となる。

ただし、②の小道を歩いているとき、「すきとほつた風がざあつと吹」き、栗の木がばらばらと実を落とし、一郎との対話が始まったことからここを通路としたが、「やまねこ」から「おかしなはがき」が来るということ自体、普通ではあり得ない異常なことなのだから、自宅にいるときから異界に入り込んでいたと考えることもできる。その場合には、(異界) ⇒ (通路) ⇒ (現実世界) という流れとなる。

一方、④の異界から現実世界へ戻るときの通路ははっきりしている。馬車別当が鞭を振り下ろした後の様子が次のように描かれている。

馬車は草地をはなれました。木や藪がけむりのやうにぐらぐらゆれました。一郎は黄金のどんぐりを見、やまねこはとほけたかほつきで、遠くをみてゐました。

馬車が進むにしたがつて、どんぐりはだんだん光がうすくなつて、まもなく馬車がとまつたときは、あたりまへの茶いろのどんぐりに変つてゐました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持つて立つてゐました。

馬車が次元を超えて移動するときの様子が実に鮮やかである。木や藪がけむりのやうにぐらぐらゆれるという描写は、まるで現代のSF映画に出てくる時空間の歪みを彷彿とさせるし、草原で金色に輝いていたどんぐりが、家に着いたときには茶色になっていたという描写も見事で、さっきまでいた異界が確かな余韻となって際立ってくる。

以上のことを踏まえて改めて考えると、童話『どんぐりと山猫』は、面倒な裁判を終わらせたことも主要なテーマだが、現実世界と異界との往還という壮大な主題を秘めていることが明らかになるのである。

### 3 各作品の解釈と分析

賢治作品の絵本化については、藤倉恵一が詳細な調査を行い一覧表を作成している。<sup>(注7)</sup>

今回、その調査結果から『どんぐりと山猫』の絵本を抽出し、その後に刊行された絵本情報等を増補した。その結果、これまでに同じ作品が別の出版社から再刊されたものを含め、27冊の絵本が刊行されたことが判明した。それらの中で、論者が実際に内容を確認できたものが13冊(別表1)、本稿ではその中から、絵が个性的で独自の境地を表現しており、しかも現在でも入手可能な次の4冊を抽出して分析対象とした。

- ①『どんぐりと山猫』小林敏也 原画、パロル舎、1979
- ②『どんぐりと山猫』高野玲子 絵、偕成社、1989
- ③『どんぐりと山猫』田島征三 絵、三起商行、2006
- ④『どんぐりと山猫』いもとようこ 絵、金の星社、2017

(出版年順)

混同を避けるため、これ以降、それぞれ [小林版] [高野版] [田島版] [いもと版] と呼称する。

なお、分析の観点だが、2つの世界の往還に着目するため、「どのような世界観で絵本化したのか」、「現実世界と異界の人物をどのように描き分けているのか」、「時空の移動をどのように表現しているのか」について見ていくこととする。即ち、(1)各絵本の世界観 (2)登場人物の描き方 (3)時空の移動 の3観点である。

#### (1)各絵本の世界観

先述の通り、童話『どんぐりと山猫』は、現実世界と異界を行き来する物語である。それぞれの絵本作家は、原作をどのように解釈し、どのような世界観で視覚化したのだろうか。

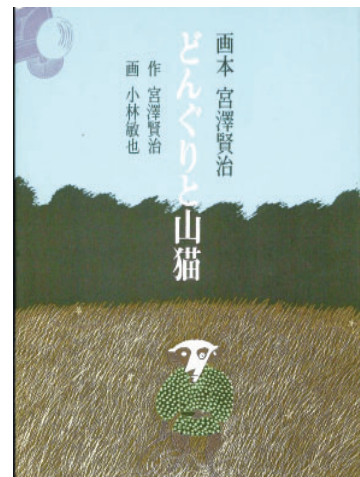
#### ① [小林版]

小林がライフワークとして取り組んでいる賢治童話の絵本化シリーズの中で、最初に出版された作品である。絵はスクラッチと呼ばれる特殊な技法で描かれており、版画のような独特の味わいがある。<sup>(注8)</sup>

いずれの場面も、使っている色数は少ない。主として黒色あるいは薄茶色を基調としており、概ね1色か2色で描かれている。全体的に暗くて不気味であり、荒涼とした草原は異界そのものという印象を受ける。

ただ、その色分けの意味はよくわからない。例えば、最初の [見開き1] は、一郎の家と背後にある山の遠景を描いたと思われ、黒を基調としている。続く [見開き2] は [見開き1] と同じ構図であるが、空が白く、家や山々の遠景は薄茶色である。薄茶色によって日中の明

るさを表現しているとも考えられるのであるが、一郎が草原で馬車別当に会う場面は、最初の出会いこそ薄茶色だが、ほぼ同じ構図の [見開き10] [見開き11] は黒色で描かれている。規則性が見当たらず



『どんぐりと山猫』原作 宮沢賢治、  
原画 小林敏也、好学社  
※クレジット表記の書式は、各社の指定による。以下同様



ず、どのような基準で色を使い分けているのか不明である。現実世界と異界を描き分けようとした形跡はなく、最初から最後まで一貫して暗くて不気味な世界として描いている。作者、小林の真意は不明だが、[小林版]を見る限り、すべてが異界の中の出来事とする童話的な世界観で描かれたようである。

## ② [高野版]

どの場面もほぼ単色で構成されているが非常に緻密である。カバー袖の内容紹介によると、銅版画の技法によるものだという。ほぼ単色であるがゆえに、却ってノスタルジックで豊かな作品世界が描き出されている。高野は、現実世界には黒のモノトーンを、異界にはベージュ色のモノトーンを使うという、実に見事な手法で作品世界を描き分けている。

例えば、最初の「見開き1」を見てみよう。おかしなはがきが届いた場面である。はがきに黒々と「かねた一郎さま…」と書かれているが、その上にベージュ色の半透明の文面が重ねられている。つまり、現実世界である一郎の家に異界からのはがきが届いたという不思議な

状況を巧みに表現しているのである。次の、山に向かって歩き始める場面はまだ黒のモノトーンだが、その次の滝に呼びかける「見開き3」から、裁判のお礼を決める「見開き15」まではベージュ色のモノトーンとなっている。そして馬車が時空の旅を始めた「見開き16」と家の前に戻った「見開き17」は元の黒のモノトーンに戻っている。

つまり[高野版]は、原作の「(現実世界) ⇒ (通路) ⇒ (異界) ⇒ (通路) ⇒ (現実世界)」という世界観を正確に反映していると考えられる。

## ③ [田島版]

野趣あふれる力強い絵が特徴である。「見開き1」は、一郎が寝ている場面であるが、全く非現実的である。布団はほぼ真上から見た状態、すぐ横に置かれたランドセルや机は斜め上から見た状態、窓はほぼ真横から見た状態で描かれている。色調の暗さもあり、何やら怪しい雰囲気の見開きとなっている。最初から異界に入り込んでいるようである。一郎が草原にやってきた「見開き6」では、深い森と暗い背景色でその怪しさは一層増す。その後、「見開き15」まで、暗く妖しい異界の雰囲気が続くのであるが、判決を申し渡す「見開き16」から「見開き18」までは背景色が無くなり白いままである。突然現実世界に戻ってしまったような違和感を覚えるが、面倒な裁判を片付けた晴れがましい気持ちの表れなのかもしれない。

最後は、きのこの馬車で家まで送り届けてもらう「見開き19」だが、ここだけは他の見開きとは全く違う描き方をしており、作者は明らかに異界から現実世界への帰還であることを認識していると思われる。つまり、[田島版]は「(異界) ⇒ (通路) ⇒ (現実世界)」という世界観に基づいていると考え



『どんぐりと山猫』作 宮沢賢治、  
絵 高野玲子、偕成社



『どんぐりと山猫』、絵：田島征三、  
作：宮沢賢治、刊：ミキハウス

られる。

#### ④ [いもと版]

お馴染みの、ちぎった和紙に着色する独特の技法によって、和らかで温かく、可愛らしい絵本となっている。ただ、その絵の雰囲気は最初から最後まで一貫しており、世界観の変化は感じられない。例えば、おかしなはがきが一郎の家に届く [見開き 1] は、淡い黄金色が背景色となっている。この色が絵本全体を貫くテーマ色となっており、草原で馬車別当に出会う [見開き 6] や山猫に出会う [見開き 8]、そして最後に一郎が「やっぱり、出頭すべしと書いてもいいといえよよかった」と回想する [見開き 16] まで、共通して使われている。そのため、絵を見ていく限りでは、現実世界と異界との区別は感じられない。すべてが明るく可愛らしい、一つの世界で完結するという世界観である。



『どんぐりと山猫』宮沢賢治 作 / いもとようこ 絵 / 金の星社 刊

#### (2)登場人物の描き方

ここでは、「かねた一郎」「馬車別当」「山猫」の3人の登場人物について考えてみよう。

一郎は、一体何歳でどのような少年なのだろうか。山のあちこちで交わす会話の内容は礼儀正しくしっかりしているが、山猫からののがきがうれしくて「うちじゅうとんだりはねたり」したという。それでいて、そのことを親には伝えず内緒で山へ出かける自立心もある。おそらく10歳から11歳くらい、無邪気で素直、真面目な少年ではなかろうか。

因みに、賢治の代表作である『雪渡り』では、狐の幻燈会に入場できるのは11歳以下の子どもだけとなっている。そのような考え方に従えば、ファンタジーの世界に入れるギリギリの年齢ということになるろう。

馬車別当は、馬車の管理をする長官という意味だろうが、実際は山猫の用事を何でもする従順な子分である。背が低く、山羊のような足をしているという。人間なのか動物なのかよくわからないが、字を書くだけの知恵があるので、落魄して妖怪化した人間のようなでもある。その葉書の字は「まるでへた」で、「大学校の五年生ですよ」と褒められると大喜びするという、浅薄で滑稽かつ下卑た存在である。だがその一方で、何らかの事情で山猫に媚びを売りつつ仕えなければならない不憫な存在でもある。

山猫はどうだろうか。まずはっきりさせておかなければならないのは、この山猫は、現実世界にいる動物の山猫ではないということである。<sup>(注9)</sup>

童話『注文の多い料理店』の発刊当時、児童雑誌「赤い鳥」に掲載された広告文には、「イーハトヴは一つの地名である。〈中略〉実にこれは著者の心象中にこの様な状景をもつて実在したドリームランドとしての日本岩手県である」とあり、本作品の舞台も岩手県であることが知られている。あくまで賢治の心象風景としての岩手県なので何がいてもおかしくはないが、日本にいる山猫は「ツシヤマネコ」

と「イリオモテヤマネコ」の2種類だけで、東北地方には生息していない。<sup>(注10)</sup>

そもそも、なぜ「猫」ではなくて「山猫」なのであろうか。「猫」という言葉からイメージされる可愛らしい飼い猫ではなく、めったに人前に姿を現さない、野性味あふれる神秘的な猫であることを期待されて登場しているはずである。異界の山を空飛ぶ馬車で縦横無尽に駆け巡り、裁判を取り仕切るなど、この山の管理人、いわば山の主のよう働きをしている本作品の山猫は、何らかの役割を担った妖怪変化、霊的存在ではないかと考えられるのである。

ただ、その言動に注目してみると、見栄を張って煙草を吸い、偉さの本質を言い当てた一郎の判決を申し渡していながら、自分自身はどんぐりたちを威圧し、一郎にまで「出頭すべし」と提案するなど、救いようのない高慢さと無教養が見え隠れする俗物であることがわかる。その一方で、どんぐり達に仲直りを提案するなど、僅かながらやさしさの片鱗もある。従って、これを絵に描いて視覚化する場合、飼い猫ではなく山猫という野性的でしたたかなイメージを残しながら、妖しくも卑俗な性格をいかに加味して表現するかが重要となろう。

#### ① [小林版]

見開きの多くが一郎の視点で描かれているためか、一郎はなかなか登場しない。唯一、終盤の「見開き26」に後ろ姿が描かれているだけである。その後ろ姿を見る限りでは、ジーンズらしきズボンをはき、トレーナーらしきものを着ている。頭は判然としないが丸刈りではなさそうで、どちらかというとな現代的な普通の少年として描かれているようである。

馬車別当は、逆三角形の顔に尖った鼻をしており、その半分は黒い影に覆われている。顔の両横には、耳なのか山羊の角なのか判然としないが、円環状の物が付いている。表情はあまりなく無表情に近い。不気味で異界の住人という雰囲気は出ているが、妖怪という感じではない。血の通っていないロボットのようなようである。

山猫は、陣羽織のようなものを羽織ってはいるのだが、その下にはボタン付きのポロシャツというちぐはぐな格好をしている。表情は豊かである。例えば一郎と対面する「見開き13」では、ほとんど兎と見間違えるような長い耳を持ち、つぶらな瞳でこちらを見ている。文章には「ひげをぴんとひっぱって、腹をつき出して言いました」とあるが、そのような横柄な様子はなく、むしろ心配や不安感が伝わってくる表情である。裁判の場面では一転して恐ろし気な顔や困惑した顔を見せているが、どうしても山猫に見えない。妖しさはないが、猫と兎が融合した妖怪がいるとしたらこのような存在だろう、そう思える描き方である。

#### ② [高野版]

一郎は、リボン付きのハイカラな帽子を被っているが、その下は着物に草履ばきというアンバランスな装いである。秋山に登るには危険と思われる軽装だが、登山のための特別な装備など持たない少年たちのことであれば仕方ないのかもしれない。一郎の表情がはっきりとわかるのは「見開き13」と「見開き17」である。大人しくて善良そうな少年として描かれている。一人で山へ登り、その住人たちと遣りとりする逞しさは、あまり感じられない。

馬車別当は、非常に目立つ縦じまの服を着ている。髪の色が薄く、どことなく洋風の顔立ちをしてい

ることも相まって、どうもこの異界には似合わない。文章の通り背が低く描かれてはいるが、[見開き13]で胸を張って立っている姿は堂々としていて、山猫に媚びたり、お世辞を言われて大喜びしたりする下卑な雰囲気も全く感じられない。

山猫はどうだろうか。初めて一郎の前に姿を現す[見開き8]では、妖怪という雰囲気はなく、むしろ引き締まった表情は理知的ですらある。堂々たる体躯に陣羽織を着て胸を張り、いかにも異界の山の主然として描かれている。

### ③ [田島版]

一郎は、丸刈り頭の健康的な少年である。青いシャツに青いズボン、青い靴を履いている。[見開き4]以外は小さく描かれているので詳しい表情はよくわからないが、驚いている場面が多い。感受性に富んだ性格なのであろう。

馬車別当は、一応人間らしい姿をして青い半纏を着ているが、肌は死人のように青い。歯があちこち抜けた口を大きく開けて笑っている姿は妖気が漂う。恐ろしい異形の妖怪でありながら、どこか憎めない面も併せ持った存在としての的確に描かれている。

山猫も個性的である。およそ猫とは思えない姿かたちをしている。白い房の付いた棒、おそらくは戦場で指揮官が持つ采配と思われる道具を持っているが、その手だけは人間的である。特筆すべきは各見開きで見せる表情で、異界の妖怪にふさわしい狡猾さ、無神経さ、卑俗さが実によく表現されている。

### ④ [いもと版]

一郎は肘や膝がやっと隠れるくらいの短い着物に下駄ばきという古風な装いをしている。一方、髪は明るい茶色で頬はほんのりと赤く、顔立ちも現代的である。こちらはずいぶん軽装なので、晩秋の深山に登って大丈夫なのか心配であるが、一郎の表情は柔らかく優しい。

馬車別当は、伸びた白髪と尖った鼻、日焼けした体が特徴的である。帯の代わりに荒縄を腰に巻き、鎌を背負い、鞭を持ってこちらを見つめる姿は不気味で、奇怪な雰囲気がよく出ている。

山猫はどうだろうか。初めて登場する[見開き8]は細部まで丁寧に描き込まれており、背景に明るいグラデーションをかけて際立たせている辺りはさすがに上手い。だが、丸く小さな赤い鼻、紅をさしたようにほんのり赤い頬からは、野性味は全く感じられない。山猫ではなく、可愛らしい飼い猫のイラストを見ているようである。異界というより、お伽噺の世界の住人として描かれた感じである。

### (3)時空の移動

既述の通り、原作の最後には、山猫がキノコの馬車で一郎を家の前まで送り届けるという場面がある。次元を超えて異界の住人たちと別れる場面は、読者を最も感動させるクライマックスにもなりうるのであるが、各絵本はどのように視覚化しているのだろうか。



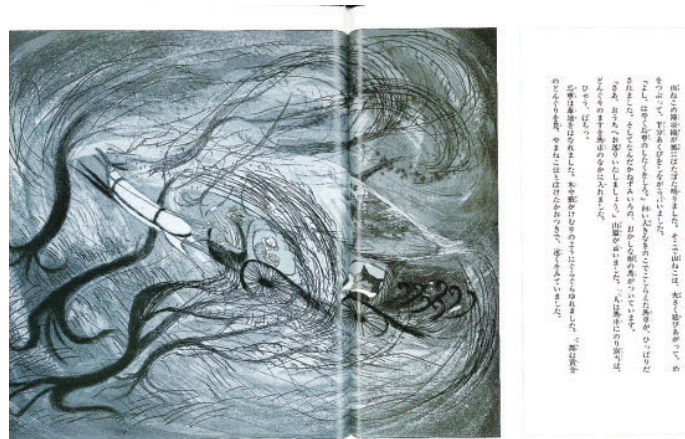
① [小林版]



『どんぐりと山猫』原作 宮沢賢治、原画 小林敏也、好学社、pp.50-51

馬車で送り届ける場面は、[見開き 25] である。黒を基調とした木々の輪郭に薄茶色を加えている。また、その輪郭が他の見開き以上にスクラッチを効かせ、掠れたように描いているため、強風が吹いている感じが出ている。文章を忠実に表現したのであろう。ただ、画面の上方に馬車が浮かんでいるが、こちらは動いている様子はなく、空中に留まっているような描き方である。異界から現実世界への帰還を意識して描いた様子はなく、時空の移動をしているという高揚感はない。

② [高野版]



『どんぐりと山猫』作 宮沢賢治、絵 高野玲子、偕成社、16-17 頁より

馬車が登場するのは [見開き] 16 である。異界を示すページ色はなくなり、薄明るい黒のモノトーンを背景として、木や藪が激しく渦を巻いている。その中を馬車が左上へと向かっている。物語の進行方向である左、そして上向きに進んでいることから、明るい未来と一郎の成長を意味しているのであろう。山猫一行が、歪んだ時空の渦に巻き込まれながら現実世界へと突き進んでいく様子が、実に見事に、感動的に表現されている。

③ [田島版]



『どんぐりと山猫』絵：田島征三、作：宮沢賢治、刊：ミキハウス

馬車が登場するのは、一番最後の「見開き 19」である。それまでの見開きの多くは、混色されて彩度の落ちた、いささか暗さを感じる色で描かれていたが、この見開きだけはどうしたことか、明るく鮮やかな色遣いとなっている。まだ出発したばかりなのであろうか、巨大な褐色の馬が馬車を引き、空には浮かばず、緑の草原を走っているように見える。猛烈なスピードのためか周囲の景色は判然とせず、色だけが線状に流れている。馬車の中が金色に光っているのは、異界の輝きがまだ失われていないことを示しているのであろう。感動的なクライマックスである。

④ [いもと版]



『どんぐりと山猫』宮沢賢治 作／いもとようこ 絵／金の星社 刊

馬車が登場するのは「見開き 15」である。馬車別当が御者となり、灰色の馬が車輪のない白い大きなキノコを引いている。馬車別当の髪や服が風になびいていることから、空を飛んでいることがわかるが、枯葉が舞っているものの周囲の景色に特別変わった様子はない。「とぼけたかおつきで、遠くをみて」いたはずの山猫は、満足そうな笑顔で目を閉じている。柀の中のどんぐりが茶色なので、現実世界に近いことがわかるのであるが、周囲は相変わらず淡い黄金色で、草原と変わった様子はない。この見開きは、「時空の移動」を意識して描いたわけではなく、童話的な世界観に立ち、すべて同じ世界の中で繰り広げられた出来事として描いたようである。

#### 4 おわりに

童話や昔話を絵本化する際、原作の世界をどのように描くべきかという点については、過去にも様々な意見が出されてきた。

例えば、松岡享子は、「昔話絵本というものは、それを読む子どもたちに、かれらがそのお話を耳で聴いたときに感じるであろうようなことを感じさせ、得るであろうような経験を得させるものであってほしい」とし、絵本作家が独特の解釈で絵本化することについては、その存在意義を認めつつも慎重な態度を示し、次のように述べている。

「絵でお話を語る」ことこそが、昔話絵本の第一義的な役割のはずです。ですから、昔話絵本は、どれだけよくその昔話を語っているかによって評価されるべきではないでしょうか。<sup>(注11)</sup>

一方、絵本製作の現場で編集の仕事に携わっている松田素子は、宮沢賢治童話の絵本化について、『なめとこ山の熊』（宮沢賢治・作、あべ弘士・絵、三起商行、2007）で、原作にはない場面を挿入した事例を紹介しつつ次のように述べている。

この絵本を描いたのはあべ弘士さん（中略）である。この絵本の中には私がどうしても触れておきたい画面がある。それは猟師の小十郎が熊を殺して皮をはぎ、血をぼたぼたしたたせながら帰るという場面だ。最初のラフ絵では、まさに文章に沿った絵だった。しかし最終的にそれは変わった。本画では小十郎は小さな黒いシルエットになり、その代わりに手前に大きく印象的に描かれたのはフクロウの一種オオコノハズク。その足にはネズミがしっかり捕えられている。……そうなのだ、と思う。生きるというのはきれいごとではない。命は命を喰らって生きているのだ。<sup>(注12)</sup>

松田は、仕留めた熊を処理する場面の視覚化を避け、原作にない場面を挿入したあべの判断を高く評価しているのだが、これは必ずしも絵本作家の勝手な解釈を無条件で尊重しているわけではなからう。原作の主題を深く理解した上で、より鮮やかに、より伝わりやすく描く、というあべの高度な判断を肯定しているのだと思われる。

生田美秋も、童話の絵本化は、「原作の深い読みが求められる難しい作業」であるとし、「絵本画家には童話の原作の意味を汲みとって解釈し、イメージによって再構築し、絵本化していく原作の再創造行為が求められる」と述べている。<sup>(注13)</sup>

冒頭にも触れたが、純粋な言語芸術とし完成された童話の絵本化には危険が伴う。これを敢えて絵本化するのであれば、原作の世界観、主題を理解し尊重しつつ、その世界を豊かに視覚化するものでなければならない。

今回分析対象とした作品は、個々の観点については原作の趣旨をよく反映させているものもあったが、3観点すべてについて原作の核心を正しく反映させているものはなかった。多様性を尊重する観点に立てば、各絵本作家が独自の解釈によって様々な作品を描くことは、確かに歓迎すべきことであろう。だ

が、本稿で設定した3つの観点は、童話『どんぐりと山猫』のアイデンティティともいえる決定的な構成要素である。見当違いの解釈に基づいた絵本では、絵本作家の世界を伝えることはできても、童話『どんぐりと山猫』の世界とその主題を伝えることは不可能である。

今回取り上げた4冊に限って言えば、原作の世界とその主題を満足できるレベルで伝えることはできていない。今後、原作をより豊かに再創造した絵本が世に出ることもあろうが、現状、童話『どんぐりと山猫』の絵本化は、まだまだ発展途上である。

## 注

- 1) 例えば、松居 直は、河合隼雄、柳田邦男との討議の中で、「でも宮沢賢治は難しいです。いわゆる絵本にはなりません。ところどころ挿絵を入れていくということはできますけれども」と語り、河合も「そうでしょうね。あれは絵本になる作品じゃないから」と返している。河合隼雄、松居 直、柳田邦男『絵本の力』岩波書店、2001、p.142
- 2) 日本児童文学学会編『児童文学事典』電子版 <https://alc.chiba-u.jp/cl/pdf/mi.pdf#page=12> (2023.10.21 取得)
- 3) 佐藤勝治『『どんぐりと山猫』について』続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成 第5巻』日本図書センター、1990、p.307
- 4) 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第二巻』大日本図書、1993、p.195
- 5) 日本児童文学学会編『日本児童文学概論』東京書籍、1976、p.65
- 6) 谷本誠剛『宮沢賢治とファンタジー童話』北星堂書店、1997、p.3
- 7) 藤倉恵一『『宮沢賢治絵本リスト』とその作成 — 手法と考察』中川素子・大島丈志編『絵本で読みとく宮沢賢治』水声社、2013
- 8) nippon.com「小林敏也が描く賢治の世界」<https://www.nippon.com/ja/views/b05803/> (2023.10.21 取得)
- 9) 例えば、草山万兎は、「この山猫は、もちろん野生動物のヤマネコではなく、奥山に住む妖異です」と述べている。草山万兎『宮沢賢治の心を読む(Ⅱ)』童話屋、2012、p.48
- 10) 生前唯一の童話集である『注文の多い料理店』には、菊地武雄の挿絵が掲載されているのだが、『どんぐりと山猫』の扉絵を見ると、山猫と思われる逞しい4本足の動物がリアルに描かれている。また、途中(p.13)には、山猫による裁判の様子まで描かれている。賢治自身が確認し了承したであろう、この2枚の挿絵が作り出すイメージが、後世の絵本作家に影響を与えた可能性はある。
- 11) 松岡享子『昔話絵本を考える』日本エディタースクール出版部、1985、p.81
- 12) 中川素子、大島丈志 編『絵本で読みとく宮沢賢治』水声社、2013、pp.15-16
- 13) 生田美秋、石井光恵、藤本朝巳 編著『ベーシック絵本入門』ミネルヴァ書房、2013、pp.79-80



（別表）現物を確認できた絵本『どんぐりと山猫』

	タイトル	絵／イラスト	発行	出版年
1	どんぐりと山猫	小林敏也 原画	パロル舎	1979
2	どんぐりと山猫	佐藤国男 画	福武書店	1989
3	どんぐりと山猫	司修・飯野和好 画	くもん出版	1993
4	どんぐりと山猫 木版画	畑中純 画	筑摩書房	1997
5	Judge Wildcat and the Acorn	本橋靖昭	(財)国際言語文化振興財団／発 売元 サンマーク	2000
6	どんぐりと山ねこ	高畠純 絵	岩崎書店	2004
7	どんぐりと山猫	本間ちひろ 絵	にっけん教育出版社	2004
8	どんぐりと山猫	田島征三 絵	三起商行	2006
9	どんぐりと山猫	佐藤国男 画	子どもの未来社	2010
10	どんぐりと山猫	小林敏也 原画	好学社	2014
11	どんぐりと山猫	畑中純 絵	蒼天社	2015
12	どんぐりと山猫	いもとようこ 絵	金の星社	2017
13	100年読み継がれる 名作 宮沢賢治 童話集 注文の多 い料理店・セロひ きのゴーシュなど	日下明 絵	世界文化ブックス	2022